文化財コーナー No.377

八幡山の天然記念物 ヒメハルゼミ（姫春蝉）

「・・歴史を告げるひめはるぜみよ・・」と鶴枝小校歌3番の一節には、ヒメハルゼミが出てきます。それは鶴枝小が八幡山に隣接していたからですね。そのヒメハルゼミは、1941年に、国指定の天然記念物に指定されました。学名のEuterpnosia chibensisのchibensisは千葉産という意味で、鶴枝の八幡山で採集された標本から命名されたことによります。鶴枝ヒメハルゼミの研究家千葉東彌氏によりますと、このセミの発見者は長生高校の前身、大成館の博物学の林壽祐先生です。1903年に林先生は、蝉の標本を岐阜県の名和昆虫研究所に送ったとされています。標本はそこを経由し、北海道大学の前身の東北帝国大学の松村博士に送られました。1917年出版の日本産セミ類に関する論文に、博士は新種として発表されています。

ヒメハルゼミは南方系のセミで、シイ、カシなどの照葉樹の森に棲息しています。狭い範囲に分布するので、近くにそのような森があっても棲息しているとは限りません。八幡山のヒメハルゼミの成虫は7月始め頃から鳴き始め、1週間もすると鳴く個体数も増え、一斉に鳴く声は非常に煩く、鶴枝小の旧校舎であった時の授業では中断したこともあったとか。鳴き声が大きいことから地元では大ゼミとも言っているようです。筆者のいすみ市にも棲息地があり、一斉に鳴いているのを聞いたのですが、やはり非常に煩かったです。

八幡山のヒメハルゼミは、ヒメハルゼミ保護協議会、守り隊、愛好家、鶴枝小の児童、地元の人たちによって地道な調査、保護活動を行ってきていますが、昔と比べると個体数が減っているのではないかと心配もされています。それは、豊かに見える森もシイ、カシなどの老木化やそれらの樹木に寄生する虫による被害、竹の繁茂、林床の乾燥化、調査観察などによる踏み固めによる硬化、植物相の変化などが専門家から指摘されているからです。今後、そうならないためにも早めに対策を立てることが必要です。

茂原市文化財審議会委員　大藪　健

▲ヒメハルゼミの成虫

▲羽化直前の幼虫

千葉県立中央博物館所蔵
撮影者　尾崎　煙雄

文芸コーナー

むすんでひらいて

吉川　純子

じっと手を見ていた啄木さん
その手のひらの中に
26年の自分の寿命は
見えていたのだろうか

内なる宇宙に向かい
感情線　頭脳線
運命線　生命線
そこから派生する
無数の微かな線

その手で握る
その手で掴む
その手で投げる
その手で遊ぶ

子供の頃の遊びを
今も続けている

むすんで
ひらいて
さて
何処で
手を打とう

◎選評　　斎藤正敏

子供の頃の遊びを今も続けていることに気付く事がある。ままにならない人生だがさて何処で手を打とう。生きる課題が山積する中で。

●偶数月は「俳句・短歌・川柳」を、奇数月は「詩」を掲載しています。
●投稿は楷書でお願いします。作品・氏名にふりがなをふってください。
※詩の原稿送付先（直接選評者へ）〒297-0032　茂原市東茂原7番地　斎藤正敏宛。
「広報もばらの詩」と朱書きしてください。原稿は30行以内でお願いします。